

4) 野菜の病害虫防除③

[アスパラガス](#)・[レンコン](#)・[ピーマン](#)・[ホウレンソウ](#)・[パセリ](#)・[カンショ](#)・[ハレישヨ](#)
[サトイモ](#)・[ショウガ](#)・[トウモロコシ](#)・[メロン](#)・[カボチャ](#)・[スイカ](#)・[ニンニク](#)・[インゲン](#)・[ソラマメ](#)

(9) アスパラガスの病害虫

(病害) [【先頭へ戻る】](#)

1. 茎枯病	188
2. 斑点病	189
3. 褐斑病	190
4. 疫病	190

(害虫) [【先頭へ戻る】](#)

1. ハスモンヨトウ、シロイモチジヨトウ (指定病害虫)	191
2. ネギアザミウマ (指定病害虫)	192
3. ハダニ類	193
4. アブラムシ類	194
5. コナジラミ類	194
6. オオタバコガ (指定病害虫)	195
7. ナメクジ類	195

(10) レンコンの病害虫

(病害) [【先頭へ戻る】](#)

1. 腐敗病	196
2. 褐斑病	197

(害虫) [【先頭へ戻る】](#)

1. アブラムシ類	197
2. スクミリンゴガイ	198

(11) ピーマンの病害虫

(病害) [【先頭へ戻る】](#)

1. ウイルス病類	199
2. 青枯病	199
3. 疫病	199
4. うどんこ病 (指定病害虫)	200

(害虫) [【先頭へ戻る】](#)

1. タバコガ	200
2. ミナミキイロアザミウマ	201
3. ミカンキイロアザミウマ	201

4. アブラムシ類 (指定病害虫)	202
5. オオタバコガ (指定病害虫)	203
6. ハダニ類	203
(12) ホウレンソウの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. ウイルス病類	204
2. べと病	204
3. リゾクトニア菌による苗立枯病	205
4. 萎凋病	206
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. モモアカアブラムシ (指定病害虫)	206
2. シロオビノメイガ	207
3. ケナガコナダニ	207
4. ハスモンヨトウ (指定病害虫)	209
(13) パセリの病害 【先頭へ戻る】	
1. うどんこ病	209
2. 疫病	210
(14) カンショの害虫 【先頭へ戻る】	
1. 基腐病	211
2. つる割れ病	212
3. サツマイモネコブセンチュウ	212
4. ハスモンヨトウ (指定病害虫)	213
5. コガネムシ類	213
6. ハリガネムシ類	214
(15) パレイショの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 疫病 (指定病害虫)	215
2. ウイルス病	216
3. 軟腐病	217
4. そうか病	217
5. 象皮病	219
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. アブラムシ類 (指定病害虫)	219
2. ジャガイモガ	220
3. ニジュウヤホシテントウ (テントウムシダマシ)	220

(16) サトイモの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 軟腐病	221
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. ハスモンヨトウ (指定病害虫)	221
(17) ショウガの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 腐敗病	222
2. 根茎腐敗病	222
3. 紋枯病	223
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. アズキノメイガ	223
(18) トウモロコシの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 倒伏細菌病	224
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. イネヨトウ	225
2. アワノメイガ	225
3. ツマジロクサヨトウ	226
(19) メロン類の病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. つる枯病	226
2. べと病	227
3. 炭疽病	227
4. つる割病	227
5. うどんこ病	228
6. 斑点細菌病	229
7. 褐斑細菌病	229
8. 灰色かび病	230
9. 疫病	230
10. ウイルス病類	230
11. えそ斑点病	230
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. アブラムシ類	231
2. ウリハムシ (ウリバエ)	231
3. コナジラミ類	232

4. ミナミキイロアザミウマ	232
5. ネコブセンチュウ	233
(20) カボチャの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. ウイルス病類	233
2. べと病	233
3. 疫病	234
4. うどんこ病	235
5. つる枯病	236
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. ミナミキイロアザミウマ	236
2. アブラムシ類	236
3. ウリハムシ (ウリバエ)	237
(21) スイカの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 炭疽病	237
2. 疫病	238
3. つる枯病	239
4. つる割病	239
5. うどんこ病	240
6. 緑斑モザイク病 (スイカ系)	240
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. タネバエ	240
2. ウリハムシ (ウリバエ)	241
3. ハダニ類	241
4. ネコブセンチュウ	242
5. アブラムシ類 (指定病害虫)	242
6. ミナミキイロアザミウマ	242
(22) ニンニクの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	
1. 春腐病	242
2. さび病	243
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. ネダニ	243
(23) インゲンの病害虫	
(病害) 【先頭へ戻る】	

1. 炭疽病	244
2. さび病	244
3. ウイルス病類	245
4. 青枯病	245
5. 白絹病	245
(害虫) 【先頭へ戻る】	
1. アブラムシ類	246
2. マメノメイガ	246
3. アザミウマ類	246
(24) ソラマメの害虫【先頭へ戻る】	
1. アザミウマ類	247

(9) アスパラガスの病害虫

(病 害)

1. アスパラガス 茎 枯 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態と防除のねらい

病原菌は被害組織上に形成した柄子殻で越冬し、これが伝染源となる。発育適温は 24℃ 付近、胞子の発芽適温は 28℃ 前後である。本病の潜伏期間は 7～10 日で、茎の罹病性は萌芽直後から 2 週間以内が高く、1 か月以上経過すると罹病しにくくなる。また乾燥した天候が続くときは伝染は余り行なわれず、雨まじりの風はまん延を促す。春芽収穫打切り直後から梅雨明けまでと 9 月以降秋雨の多いときに多発する。防除は土壌表面の焼却、発病茎の早期除去、薬剤防除（立茎後 20 日間隔）を組み合わせる。

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 伝染源除去のため、発病茎は早期に除去するとともに、栽培終了後は全茎を株元からできるだけ低く刈り取り処分する。
- (2) 茎葉刈り取り後の土壌表面の焼き、敷わらは発病抑制に有効である。
- (3) 雨よけ圃場においても、降雨が降り込みやすいサイド部や前年に発病が認められた所で初発生し、その後周辺に拡大するが多い。このような場所での発生に注意するとともに、雨の振り込みを防ぐため降雨時にはサイドビニルを下ろす。
- (4) 茎葉が伸びすぎたら 110cm 位で先刈りし、通風を良くする。
- (5) 灌水や降雨等といった水はねで伝染するので、できるだけ小さい水滴で灌水する。

・薬剤防除

(アスパラガス 茎枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	IC ボルドー 6 6 D (塩基性硫酸銅)	
M1	コサイド 3000 (水酸化第二銅)	
M1	クプロシールド (塩基性硫酸銅)	
M5	ダコニール 1 0 0 0 (TPN)	
M7	ベフラン液剤 2 5 (イミノクタジン酢酸塩)	
M7	バルコート水和剤 (イミノクタジンアルベシル酸塩)	
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
1	ベンレート水和剤 (ベノミル)	発病前である立茎期の使用が効果的
2	ロブラール水和剤 (イプロジオン)	

(次頁へつづく)

(アスパラガス 茎枯病 つづき)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
7+M5	ベジセイバー (ペンチオピラド, TPN)	
11	アミスター20フロアブル (アズキシストロビン)	
11+7	シグナムWDG (ピラクロストロビン・ボスカリド)	
14	リゾレックス水和剤 (トルクロホスメチル)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. アスパラガス 斑点病 [【目次に戻る】](#)

1) 生態と防除のねらい

主に葉に発生する。病原菌は前年の被害茎葉上で越冬し、翌年、分生胞子を形成して伝染源となる。茎葉が繁茂して通風が悪くなると発生しやすく、多雨時に多発する。本病菌は近紫外線により孢子形成が促進されるため、近紫外線除去フィルムを被覆し発病を抑える。

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 紫外線カットフィルムを被覆する。
- (2) 換気を図るため、茎葉の過繁茂を避け好天時にはサイドビニルを解放する。

・薬剤防除

(アスパラガス 斑点病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3	ラリー水和剤 (マイクロブタニル)	
11	アミスター20フロアブル (アズキシストロビン)	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	
M1	コサイド3000 (水酸化第二銅)	
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

3. アスパラガス 褐斑病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態と防除のねらい

主に枝部、葉部に周辺が赤褐色で内部が褐色の斑点を形成する。病斑は斑点病と類似しているが、本病は病斑の表面に肉眼で確認できる灰色～黒色の分生子塊を多数形成し、斑点病はこれを形成しないため、両病害の識別は可能である。病原菌の生育適温は 25℃前後である。本病の潜伏期間は 20 日～30 日間で、発生は秋期以降に増加する。

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 伝染源を除去するため、収穫終了後の刈り取った残さは必ず圃場外へ持ち出し、火炎放射器でうね面及び通路を焼く。
- (2) 換気を図るため、茎葉の過繁茂を避け好天時にはサイドビニルを解放する。

・薬剤防除

(アスパラガス 褐斑病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
2	ロブラール水和剤 (イプロジオン)	
7	アフェットフロアブル (ペンチオピラド)	
11	アミスター20フロアブル (アゾキシストロビン)	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	
M1	コサイド3000 (水酸化第二銅)	
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

4. アスパラガス 疫病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態と防除のねらい

(1) 病徴

若茎に発生すると、地際部または先端部が水浸状に軟化・腐敗するとともに、腐敗部から上が湾曲する。若茎に水浸状腐敗をもたらす病害として、他に細菌による軟腐病が知られているが、軟腐病は強い悪臭を放つことから区別出来る。その他に、成茎の病斑(周縁が褐色で内部が白色)、根の褐変・腐敗、擬葉の黄化を伴う株枯れ、改植苗の株枯れを引き起こす。

(2) 診断

ナス果実を用いた捕捉法により、アスパラガスおよび土壌から診断可能である。すなわち、アスパラガスの病変部から 5mm 立方程度の小片を切り出し、切り込みを入れたナス果実に埋め込んで、多湿状態で 25～35℃に 2～4 日保つ。疫病であれば、ナス果実が茶褐色に腐敗し、表面に白いカビが生えて発病する。土壌から検出する場合は、コップ等に土壌を約 50g 入れ、蒸留水を 200mL 入れてよく混ぜ、半分に切ったナス果実を立てて、25～35℃に 2～4 日保つ。疫病であれば、上記と同様にナス果実が発病する（(2)－4. イチゴ疫病の診断方法を参照）

(3) 生態

本菌はイチゴ、ナス、トマトの果実や苗なども侵す多犯性の菌である。病原菌の生育適温は 30℃前後で、35℃でも生育する。土壌伝染性の菌であり、遊走子（胞子の役割をする）が水の移動とともに拡がるため、感染・発病に水が大きく関与する。

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 畝間に水が溜まらないよう、ほ場の排水対策を行う。
- (2) 罹病若茎や株は速やかに圃場外へ持ち出し、処分する。
- (3) 全面改植時には、太陽熱消毒等の土壌消毒を行う。

・薬剤防除

(アスパラガス 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
40+M5	プロポーズ顆粒水和剤 (ベンチアバリカルブイソプロピル,TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法](#)参照）。

(害 虫)

1. アスパラガス ハスモンヨトウ、シロイモチジヨトウ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」の項を参照

(アスパラガス ハスモンヨトウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
11A	ゼンターリ顆粒水和剤 (BT (生菌))	シロイチモジヨトウにも登録あり
11A	デルフィン顆粒水和剤 (BT (生菌))	シロイチモジヨトウにも登録あり
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
15	ノーモルト乳剤 (テフルベンズロン)	
28	フェニックス顆粒水和剤 (フルベンジアミド)	
28	プレバソフフロアブル5 (クロラントラニリプロール)	
UN	プレオフロアブル (ピリダリル)	
-	コンフューザーV (アルミゲルア, ウワバルア, ダイアモルア, ビートアーミルア, リトルア)	シロイチモジヨトウにも登録あり 使用上の留意点は、「防除関係参考資料」を参照

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

2. アスパラガス ネギアザミウマ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ネギアザミウマ」の項を参照。

2) 防除のねらい

近紫外線除去フィルム被覆等による本虫の侵入抑制と薬剤防除を組み合わせる防除を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 施設の入口、側面、換気部は必ず防虫ネットで被覆する。また、紫外線除去フィルムの被覆や光反射シート等を圃場周辺部に設置し侵入防止を図る。
- (2) ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

・薬剤防除

(アスパラガス ネギアザミウマ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 (ジノテフラン)	アザミウマ類
4A	モスピラン水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	アザミウマ類
5	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)	アザミウマ類
5	ディアナSC (スピネトラム)	アザミウマ類
14	リーフガード顆粒水和剤 (チオシクラム)	アザミウマ類
23	モベントフロアブル (スピロテトラマト)	アザミウマ類
28	ベネビアOD (シアントラニリプロール)	アザミウマ類
※ 30	グレーシア乳剤 (フルキサメタミド)	アザミウマ類
※ 34	ファインセーブフロアブル/ アベンジャーフロアブル (フロメトキン)	アザミウマ類

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#)）。

3. アスパラガス ハダニ類 [【目次に戻る】](#)

1) 生 態

県内では、カンザワハダニとナミハダニが認められ、5～6月頃から漸増し始め、夏季～秋季にかけて発生が多い。被害部位は茎葉および収穫部位の鱗片葉である。加害程度が大きくなると、茎葉は黄変して、擬葉は落葉し、鱗片葉は加害部位が白い斑点となり、商品価値が著しく低下する。

2) 防除のねらい

- (1) 本虫のハウス内での越冬およびハウスへの侵入を抑制する。
- (2) 早期発見に努める。黄変した被害部位を高温による葉焼け等と間違わないようにする。
- (3) 薬剤散布を行う際は、十分な散布量を確保するとともに、散布後は必ず防除効果の確認を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) ハウス内およびハウス周辺の雑草を除去する。
- (2) 地上部刈り取り後の残渣をハウス内に残さない。

(3) 地上部刈り取り後、火炎放射器でうね面および通路を焼く。

・ **薬剤防除**

(アスパラガス ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
6	コロマイト乳剤 (ミルベメクチン)	
13	コテツフロアブル (クロルフェナピル)	
20D	マイトコーネフロアブル (ピフェナゼート)	
25A	ダニサラバフロアブル (シフルメトフェン)	
25A	スターマイトフロアブル (シエノピラフェン)	
25B	ダニコングフロアブル (ピフルブミド)	
-	フーモン (ポリグリセリン脂肪酸エステル)	ハダニにかかるように十分量を散布する。
-	サフオイル乳剤 (調合油)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

4. アスパラガス アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

3～8月に発生が多い。収穫部位の鱗片葉および立茎した茎葉を加害する。

2) 防除のねらい

本虫のハウスへの侵入を防止する。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 周辺雑草を除去する。
- (2) 施設の入口、側面、換気部は必ず寒冷紗で被覆する。

5. アスパラガス コナジラミ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・コナジラミ類」の項を参照

・薬剤防除

(アスパラガス コナジラミ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 (ジノテフラン)	
9B	コルト顆粒水和剤 (ピリフルキナズン)	
-	オレート液剤 (オレイン酸ナトリウム)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

6. アスパラガス オオタバコガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・オオタバコガ」の項を参照

(アスパラガス オオタバコガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	アーデント水和剤 (アクリナトリン)	
6	アフーム乳剤 (エマメクチン安息香酸塩)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

7. アスパラガス ナメクジ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年に2回発生し、成虫は作物の根の周辺や土中浅いところで越冬する。雑食性で春と秋に敷わらや土中浅くに産卵する。

卵は20日程度でふ化し、幼虫は成長するにしたがい夜間の活動が盛んになる。ただし、曇

天、降雨時は日中でも活動する。酸性土壌や湿潤な場所での産卵数並びに生息数が多い。

2) 防除のねらい

- (1) 有機質肥料を多用した場合に被害が多い。
- (2) 産卵前をねらって、早めに駆除する。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 排水をよくし前作物の残葉などを除去する。
- (2) 石灰を施して酸度を矯正する
- (3) 除草などをして、ほ場周辺を清潔にする。
- (4) 捕殺につとめる。

・ 薬剤防除

(アスパラガス ナメクジ類)

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
スラゴ (燐酸第二鉄)	ナメクジ類の発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

防除対策については「[佐賀県特別栽培農産物認証制度に対応した総合防除体系](#)」も参照してください。

(10) レンコンの病害虫

(病 害)

1. レンコン 腐敗病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

土壌中に罹病残渣が残っていたり、保菌種ハスを栽培した場合に発病しやすい。夏期に多発する。腐敗病にはフザリウム属菌による褐色腐敗病、ピシウム属菌による黒紫色腐敗病がある。発病は全身で起こる。地下茎では両菌による混合型の腐敗を起こす。菌糸や厚壁孢子で被害部で生存したもの、罹病レンコンの植え付けが主な伝染源となる。

2) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 種ハスは健全ほ場から採取する。
- (2) 収穫後の茎葉を除去する。特に被害茎葉や腐敗ハスには注意する。
- (3) フザリウム属菌の場合は冬期に湛水状態とする。

ただし4～5年経過した場合、根腐れを起こしやすいので排水し土壌の風化を図る。

(4) 整地は均一になるよう丁寧に行い、9月中～下旬までは深水とする。

(5) 整地時に石灰窒素を10a当り60kg程度を施し土壌と混和する。

なお、pHが7以上の場合は控える。

(6) 施肥は窒素過多にならないようにする。

2. レンコン 褐斑病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は枯死した罹病葉や葉柄で越冬する。病原菌の発育適温は28℃である。分生子は4月頃から形成される。新葉で発病しやすい。

2) 防 除 法

・耕種的防除

(1) 圃場内の葉柄は年度内に刈り取る。

(2) 畦畔などに残存する罹病茎葉は圃場外へ持ち出し処分する。

(3) 施肥、灌水などを適正に行う。

(害 虫)

1. レンコン アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本虫はモモ、スモモ、ウメなどで卵態で越冬し、春季にハス、スイレン、カワホネ、クワイなどに飛来し寄生する。ハスには4月中旬頃から飛来しはじめ、主として萌芽まもない立葉（巻葉）に多数寄生し、吸汁加害する。生息密度は5月中旬から6月下旬にかけて最も高い。夏から秋にかけては主として若い立葉に寄生し、硬化した健全葉には寄生しない。

2) 防除のねらい

被害はハスの立葉（巻葉）2～3枚目まで（5月中旬～下旬）が最も大きい。そのため、防除はこの時期に徹底する。

3) 防 除 法

・薬剤防除

(レンコン アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	オルトラン粒剤 (アセフェート)	
4A	アドマイヤー1粒剤 (イミダクロプリド)	
4A	ダントツ粒剤 (クロチアニジン)	
29	ウララ粒剤 (フロニカミド)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

2. レンコン スクミリングガイ [目次に戻る]

1) 生 態

本種の成貝は1回の産卵で約320個の卵からなる鮮紅色の卵塊を雑草や水路のコンクリート壁に産み付ける。年間総産卵数は2,400～8,600個(平均3,400個)になる。適温の場合、本貝の卵は10～20日でふ化し、水面上の卵塊から水中へと落下する。その後約2ヶ月で殻高3cmの成貝になる。本貝は2～38℃のかなり広い水温範囲で生存するが、14℃以下では活動を休止して休眠状態に入る。用排水路では橋の下や土管などの暖かいところを中心に越冬が可能である。

2) 防 除 法

・ 薬剤防除

(レンコン スクミリングガイ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
-	スクミノン (メタアルデヒド)	
-	スクミンベイト3 (燐酸第二鉄)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

(11) ピーマンの病害虫

(病 害)

1. ピーマン ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

トマトのウイルス病類の項を参照

2. ピーマン 青 枯 病 [\[目次に戻る\]](#)

トマトの青枯病の項を参照

3. ピーマン 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

施設栽培では地際部や根に発生することが多い。地際部は暗緑色ないし暗褐色水浸状を呈してしぼみ、根は部分的に褐変腐敗し、地上部は萎凋枯死する。一方、露地栽培では茎、葉、果実に症状が発生しやすい。

病原菌は糸状菌の一種で、土壤中で越冬し、水湿と適温を得ると遊走子のうを形成し、伝染する。本菌の生育適温は28～30℃で、ナス科、ウリ科作物に寄生しやすい。本病は多湿環境で発病しやすく、連続降雨や圃場の浸冠水で多発する。

2) 防除のねらい

- (1) 前作または前年に本病が多発した圃場には作付けしない。
- (2) 多湿条件にならないようにする。
- (3) 早期発見、早期防除に努める。

3) 防 除 法

・耕種の防除

- (1) 排水対策を行い、浸冠水を防ぐ。また、ハウスでは換気を図って、多湿にならないようにする。
- (2) 敷わら、マルチをして土壌面から病原菌の跳ね上がらないようにする。
- (3) 発病葉や発病株等は二次伝染源となるので、抜き取り、圃場外へ持ち出し、処分する。

・薬剤防除

(ピーマン 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
21	ランマンフロアブル (シアゾファミド)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

4. ピーマン うどんこ病 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉に発生し、はじめ葉の裏面に葉脈に区切られて薄く霜状のかびを生じる。症状が進むと、しだいに全体が黄化し、先端の幼若葉を残して落葉する。病原菌は、ピーマンのほかにもトウガラシ、オクラ、トマトなどにも寄生する。菌糸は、葉肉細胞の組織内で増殖する。15～18℃で発病し、最適温度は25℃である。分生子の飛散は、日中に多く、夜間は少ない。

2) 防除のねらい

- (1) 薬剤防除は予防的に行う。
- (2) 収穫終了後の残渣の処分を十分に行い、次作への伝染源を残さないようにする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 伝染源を断つため、残渣の処分を十分に行う。
- (2) 過乾燥とならないよう、水管理に注意する。
- (3) 窒素肥料を多用しない。
- (4) 過繁茂を避け、日当たり及び風通しを良好に保つ。

・薬剤防除

(ピーマン うどんこ病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
11+7	シグナムWDG (ピラクロストロビン, ボスカリド)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

(害 虫)

1. ピーマン タバコガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本虫の発生は年3～4回と考えられる。蛹態で土中で越冬し、第1回成虫は6月中旬頃から発生がみられ、8月下旬～9月上旬ごろに最も多い。卵は夜間に新葉や芽、花蕾、幼果などに産卵する。ふ化幼虫は3令以後に果内に食入する。発生は不斉一で、発育の異なる個体が混在する。1雌あたり400～500粒を産卵する。

2) 防除のねらい

- (1) タバコ畑近くのほ場に出やすい。
- (2) 幼虫は果実に食入し、内部から食害して品質を著しく低下する。防除は幼虫の果実への食入防止をねらって実施する。

3) 防 除 法

・ 薬剂防除

(ピーマン タバコガ)

IRAC コード	薬 剂 名 (成 分 名)	備 考
1A	ランネート45DF (メソミル)	露地栽培に限る

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剂の分類](#)」参照

注) 各薬剂の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法](#)
[参照](#))。

2. ピーマン ミナミキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

・ 薬剂防除

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ミナミキイロアザミウマ」の項を参照

(ピーマン ミナミキイロアザミウマ)

IRAC コード	薬 剂 名 (成 分 名)	備 考
4A	アドマイヤー水和剤 (イミダクロプリド)	施設栽培に限る

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剂の分類](#)」参照

注) 各薬剂の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

3. ピーマン ミカンキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

・ 薬剂防除

「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ミカンキイロアザミウマ」の項を参照

(ピーマン ミカンキイロアザミウマ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	アーデント水和剤 (アクリナトリン)	
4A	モスピラン水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

4. ピーマン アブラムシ類 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ピーマンにはワタアブラムシとモモアカアブラムシの寄生が多い。

ナスのアブラムシ類の項を参照

2) 防除のねらい

ナスのアブラムシ類の項を参照

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

(1) 紫外線除去フィルム利用も有効である。

ナスのアブラムシ類の項を参照

・ 薬剤防除

(ピーマン アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	アグロスリン乳剤 (シペルメトリン)	
23	モベントフロアブル (スピロテトラマト)	
28	ベリマークSC (シアントラニリプロール)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

5. ピーマン オオタバコガ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 2) 防除のねらい
 3) 防 除 法
- 「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・オオタバコガ」の項
 参照
- ・耕種的防除
 - ・薬剤防除

(ピーマン オオタバコガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
5	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

6. ピーマン ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

主にカンザワハダニ、ナミハダニとチャノホコリダニの発生が多い。

ハダニ類は、葉の裏側に寄生するが多い。吸汁による軽微な被害では、葉脈間が黄化する程度であるが、寄生密度が高まると、葉は黄変し、やがて枯死、落葉する。本虫は生育が速く、1年に約10世代経過する場合があります、特に、高温、乾燥条件下では短期間に急増する。

チャノホコリダニによる初期症状は展開直後の葉の周辺部がやや内側に湾曲する。密度が高まると生長点がちぢれて新葉の展開が抑えられ、芯止まり症状となり、やがて枯死する。幼果で寄生を受けると褐変コルク化し、生育は止まる。

2) 防除のねらい

寄生密度が高くなると、防除が困難になるので発生初期の防除に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

主な発生源はほ場内外の雑草なので、除草を徹底する。

・薬剤防除

(ピーマン チャノホコリダニ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
25A	スターマイトフロアブル (シエノピラフェン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

(12) ホウレンソウの病害虫

(病 害)

1. ホウレンソウ ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

- ・病原ウイルスとして下記の5種のウイルスが知られている。また、混合感染していることも多い。
- ・ビートモザイクウイルス（BMV）はホウレンソウのほかフダンソウ、アカザ、ヒユ、エンドウ、ナズナなどに感染する。
- ・インゲンマメ黄斑モザイクウイルス（BYWV）に感染した株は初め葉脈透化を生じた後、葉がねじれるとともにモザイク症状を示す。その後葉脈・葉柄にえそを生じて萎縮する。生育初期に感染すると萎ちょう、枯死することが多い。
- ・キュウリモザイクウイルス（CMV）は寄生範囲の広いウイルスで100種以上の植物を侵すので、伝染源は常に畑の周囲にあると考えてよい。
- ・カブモザイクウイルス（TuMV）はホウレンソウのほかダイコン、各種アブラナ科植物を侵す。
- ・タバコモザイクウイルス（TMV）でホウレンソウに発生しているTMVはTMV-C（アブラナ科系）である。感染株での症状は退緑部と濃緑部の境界が比較的明瞭なモザイク症状を呈する。葉は奇形となり、生育は悪く、若干萎縮する。

2) 防除のねらい

5種の病原ウイルスはいずれもアブラムシによって伝染するので、アブラムシの駆除及び伝染源となり得る植物の除去に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

イネ科作物やネギ類の間作を行う。

・薬剤防除

[ホウレンソウのモモアカアブラムシの項](#)参照

2. ホウレンソウ ベ と 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

11月～翌年4月にかけて発生し、特に11～12月、3～4月に発生が多い。8～18℃、

特に 10℃前後で曇天、多雨時に発生しやすい。また早まき、厚まき及び多肥栽培の場合は、葉が繁茂して軟弱となるため多発しやすい。連作圃場では発生が多い。

2) 防除のねらい

発病後では防除が困難であることから、予防対策が重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

抵抗性品種を選ぶ。

罹病葉は圃場外に持ち出し適切に処分する

・薬剤防除

(ハウレンソウ ベと病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
21	ライメイフロアブル (アミスルブロム)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

3. **ハウレンソウ リゾクトニア菌による苗立枯病** [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

土壌中や被害残さの中の菌核や厚膜化細胞が伝染源となる。病原菌の生育適温は 25～28℃であり、高温多湿時に発生が多い。

2) 防 除 法

・耕種的防除

多湿にならないよう排水をはかる。

・薬剤防除

(ハウレンソウ 苗立枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
7	バシタック水和剤 7 5 (メプロニル)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

4. ホウレンソウ 萎凋病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

第1次伝染源は土壌中に残存した厚膜胞子である。最初下葉から黄化、萎凋が起り、しだいに株の内側の葉に進展し、生育不良となり枯死する。被害株の根の導管は褐変している。発病適温は25～30℃と高く、15℃以下では発病しにくい。

2) 防 除 法

・耕種的防除

発病株は次作の伝染源となるので、圃場外へ持ち出し処分する。
多湿にならないよう排水を図る。

・薬剤防除

(ホウレンソウ 萎凋病)

IRAC	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
8B+8A	ソイリン (クロルピクリン, D-D)	土壌消毒・資材消毒の項参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#))。

(害 虫)

1. ホウレンソウ モモアカアブラムシ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

アブラナ科の病害虫のアブラムシの項を参照

2) 防除のねらい

ウイルス病を媒介するので早めに駆除する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

・薬剤防除

(ホウレンソウ モモアカアブラムシ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ダイアジノン乳剤40 (ダイアジノン)	アブラムシ類

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬

「登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. ホウレンソウ シロオビノメイガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

成虫は5～6月から出現し、9～10月に発生が多くなる。幼虫による被害は秋季に多く、ホウレンソウでは夏まきと秋まきの生育初期で被害が甚だしい。アカザ科のアカザ、イヌビユ、ケイトウおよびフダンソウなどにも寄生する。

2) 防 除 法

・耕種的防除

(1) 圃場周辺の雑草を除去し、近くでケイトウなどを栽培しないようにする。

3. ホウレンソウ ケナガコナダニ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本種の増殖源は稲麦ワラ、籾殻、残渣等の有機物である。通常、土壌が適湿であれば土壌中や表層の藻類に生息するが、土壌が乾燥すると、空气中湿度が高まる夜間に、地上部のホウレンソウに移動する。

ホウレンソウでは新芽や新葉を吸汁加害し、小さな穴をあけ、葉の褐変を招く。展開葉はこぶ状の突起を生じ、光沢を帯びて縮葉し、奇形化する。加害の激しい株は生育が著しく阻害され、場合によっては枯死する。

2) 防除のねらい

発生・増殖源となる稲麦ワラや籾殻等の使用を控えるとともに、収穫残渣は直ちに圃場外へ持ち出し、適切に処分する。

また、土壌が過乾燥になるとホウレンソウに移動し加害することから、土壌の湿潤状況を確認し適宜灌水を行う。

3) 防 除 法

・薬剤防除

(ホウレンソウ ケナガコナダニ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
13	コテツベイト (クロルフェナピル)	
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
23	モベントフロアブル (スピロテトラマト)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

照)。

4. ホウレンソウ ハスモンヨトウ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防除法
 - ・耕種的防除
 - ・薬剤防除

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ハスモンヨトウ」の項参照

(ホウレンソウ ハスモンヨトウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
28	プレバソンフロアブル5 (クロラントラニリプロール)	
※ 28	ヨーバルフロアブル (テトラニリプロール)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

(13) パセリの病害虫

(病 害)

1. パセリ うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態

病原菌は糸状菌の一種で、子のう菌類に属する純寄生菌である。二次伝染は罹病株上の菌そうに形成された分生子の飛散により行われる。しかし、一次伝染源となる子のう殻の形成が確認されておらず、越冬形態については不明な点が多い。

葉と葉柄に発生し、罹病株は生育がやや劣り、多発すると生育が停滞する。発生は7月から10月にかけて多く、高温期と低温期には病勢は滞る。

2) 防除のねらい

- (1) 発生初期の防除を徹底する。
- (2) 下葉かきを行い発病葉を除去する。
- (3) 薬剤が葉裏にもかかるよう、十分量を丁寧に散布する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 軟弱徒長・過繁茂は発生を助長するため、通風を良くし、適正な肥培管理を行う。
- (2) 夜間の高湿度は発生を促進するので、夕方の灌水は避ける。
- (3) 発病葉等はできるだけ除去し、圃場外に持ち出し処分する。

・薬剤防除

(パセリ うどんこ病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
NC	ハーモメイト水溶剤 (炭酸水素ナトリウム)	
NC+M1	ジーファイン水和剤 (炭酸水素ナトリウム, 無水硫酸銅)	ジーファイン水和剤に、サンクリスタル乳剤を加用すると、汚れの軽減、効果の向上が見られる。
-	サンクリスタル乳剤 (脂肪酸グリセリド)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. パセリ 疫病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で、土壤中で越冬し、伝染源となる。夏季高温時に根や地際部に感染、発病し、根は褐変してくびれ、維管束部付近も褐変する。発病株は、株全体が萎凋し、青枯れ症状となる。症状が進むと、根や地際部は軟化、腐敗し、地上部は急速に褐変、枯死する。

2) 防除のねらい

- (1) 菌は土壤中で越冬するため、土壤消毒を行う。
- (2) 床土は無病土を使用する

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 浸冠水しないよう、圃場内の排水を良くする。
- (2) 発病地では、栽培前に土壤消毒を行う。
- (3) 被害株は圃場外へ持ち出し処分する。

・薬剤防除

(パセリ 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
11+4	ユニフォーム粒剤 (アゾキシストロビン・メタラキシルM)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(14) カンショの病害虫

(害 虫)

1. カンショ 基腐病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で、宿主特異性があり、ヒルガオ科の植物（主にサツマイモ）を侵す。主に感染した種イモや苗を植え付けることによって圃場に持ち込まれる。発病株の病変部には、柄子殻と呼ばれる微小な黒粒が多数形成され、柄子殻から漏出した多量の胞子は風雨や圃場の湛水により周辺株に感染し、発生が拡大する。収穫後は、圃場に残された罹病残渣中で病原菌が生き残り、次作の伝染源となる。また、病原菌に感染した塊根を種イモとして利用すると、育苗中に感染が広がり、苗が汚染される。

発病株は、葉の赤変や黄変がみられ、生育不良や萎凋、枯死が起こる。そのような株では地際部が黒変し、柄子殻が多数形成される。塊根では、なり首側から腐敗する。見た目健全な塊根でも、貯蔵中などに腐敗することがある。

2) 防除のねらい

- (1) 防除対策の基本は、病原菌を「持ち込まない、増やさない、残さない」ことである。
- (2) 複数の対策を組みあわせて総合的な対策を行う。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 排水不良田で発生が多くなるので、圃場の排水対策を行う。
- (2) 本病の発生していない圃場で生産された健全種苗を使用する。
- (3) 圃場を観察し、発病株の早期発見、早期抜き取りに努める。
- (4) 収穫後の残渣は圃場から持ち出すとともに、細断すき込みなどを行い、残った残渣の分解を促進させる。

・ 薬剤防除

- (1) 定植前の苗消毒を確実にを行う。
- (2) 発病株の抜き取り後には、感染予防のため、本病に登録のある薬剤を散布する。

(カンショ 基腐病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
※ M1	ICボルドー66D (塩基性硫酸銅)	
※ M1	Zボルドー (塩基性硫酸銅)	
※ 1	ベンレート水和剤 (ベノミル)	植付け前に30分間の苗全身浸漬を行う。
※ 3	トリフミン水和剤 (トリフミゾール)	
※ 11	アミスター20フロアブル (アズキシストロビン)	

2. カンショ つる割れ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で、宿主特異性があり、ヒルガオ科の植物（主にサツマイモ）を侵す。土壌伝染性で、苗の切り口や細根の傷口から侵入し、感染する。侵入した本菌は導管組織を侵す。収穫期近くに感染した株では、外観上異常のない塊根にも本菌が潜伏するため、これを種イモに用いた場合、苗伝染が起こる。そのため、苗伝染による発病が多いと考えられている。

本病は植え付けて間もない活着期から発生し、枯れて欠株となる。その後、収穫期まで発生し、つるが伸び茂った大きな株でも、株全体が枯れる。収穫期近くでは、つるの一部だけが枯れることもある。葉は黄色みを帯び生気がなくなり、黒ずんで紫褐色になる。このような株のつるの地際部は、縦に大きく裂け、茎の繊維が目立つつる割れ症状となる。

2) 防除のねらい

(1) 本病の伝染経路のうえで大きな比重を占める苗伝染を防止することが重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 本病の発生していない圃場で生産された健全種苗を使用する。
- (2) 圃場を観察し、発病株の早期発見、早期抜き取りに努める。

・薬剤防除

- (1) 定植前の苗消毒を確実に行う。

(カンショ つる割病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
※ 1	ベンレート水和剤 (ベノミル)	植付け前に30分間の苗全身浸漬を行う。

3. カンショ サツマイモネコブセンチュウ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

キュウリのネコブセンチュウの項を参照

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全な種いもを使用する。
- (2) 連作を避け、ラッカセイなどの比較的寄主・増殖の少ない作物と輪作する（輪作による線虫防除参照）。
- (3) 堆厩肥を施し、耕土の肥培に注意する。
- (4) 収穫時の被害残さは処分し、翌春の発生源を少なくする。
- (5) 抵抗性品種を選ぶ。

サツマイモネコブセンチュウに対する品種抵抗性

強	中	弱
農林 2 号、同 3 号、同 5 号、同 9 号、サツマアカ、ベニセンチュウ、ベニワセ、ミナミユタカ	農林 4 号、同 7 号、同 8 号、沖縄 100 号、岐阜 1 号、アリアケイモ、タマユタカ、コガネセンガン、ベニオトメ	蔓無源氏、高系 14 号(ことぶき)、七福、護国、鹿児島、農林 1 号、同 6 号、コマチ、シロセンガン

・薬剤防除

共通資料の「土壌消毒・資材消毒の項」及び「線虫類と防除法」参照

4. **カンショ ハスモンヨトウ (指定病害虫)** [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防除法
 - ・耕種的防除
 - ・薬剤防除

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ハスモンヨトウ」の項) 参照

(カンショ ハスモンヨトウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	トクチオン乳剤 (プロチオホス)	
1A	ランネート45DF (メソミル)	

注) IRAC コードについては、章末の「作用機構による薬剤の分類」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

5. **カンショ コガネムシ類** [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態

ドウガネブイブイおよびアオドウガネによる被害が多く、その他、ヒメコガネ、アカビロウドコガネも加害することが知られている。

コガネムシ類の年間の発生回数は、通常年 1 回で、2～3 令幼虫で越冬する。羽化成虫の寿命は約 1 月で、その間に地表下に産卵する。第 1 世代幼虫は 6 月下旬頃からみられる。成虫は植物上に群生し葉を食害する。幼虫は地下部の塊根を加害し品質を著しく低下させる。

コガネムシ類は、砂壤土などの軽い土壤に発生が多い。また、堆厩肥など有機質を多用すると発生が多い。

2) 防除のねらい

植付時に粒剤を処理する。粒剤の効果が不十分な場合は生育期（第1世代幼虫の加害初期）に薬剤を株元に追加散布する。

3) 防除法

・薬剤防除

(カンショ コガネムシ類幼虫)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ダイアジノン粒剤3 (ダイアジノン)	
※ 1B	ダイアジノンSLゾル (ダイアジノン)	
※ 4A	ダントツ粒剤 (クロチアニジン)	
1B+1A	ランダイヤ粒剤 (ダイアジノン, メソミル)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

6. **カンショ ハリガネムシ類** [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本県では、クシコメツキ、クロクシコメツキ、サビキコリ類による被害が確認されており、優占種はクシコメツキである。

ハリガネムシ類による被害は、幼虫が塊茎に食入し、針金を通したような食入痕をつくるため、品質を著しく損なう。

ハリガネムシ成虫の発生は主として4月下旬から5月中旬に地上でみられ、雌は交尾を行うと土中に潜り、地表から浅いところに産卵するとされている。幼虫期間は非常に長く、1世代が完了するのに3～4年を要するとされている。

2) 防除のねらい

圃場内に生息する幼虫防除をねらって植付前に粒剤を土壌処理する。

3) 防除法

・薬剤防除

(カンショ ハリガネムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ダズバン粒剤 (クロルピリホス)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(15) バレイショの病害虫

(病 害)

1. バレイショ 疫 病 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は卵孢子で越年し、翌春の伝染源となる。

本病は比較的低温かつ高湿度下で発生しやすい。曇雨天日が続くようなときに発生が著しい。また、窒素過多等で茎葉が茂り風通しの悪い場合にも発生は多くなる。

春作では5月頃から、秋作では10月頃から発生し始め、悪天候下では急激にまん延する。

2) 防除のねらい

- (1) 罹病いもはほ場に残さないようにする。
- (2) 被害ほ場で栽培された種いもの利用は避ける。
- (3) 発病前から必ず防除を行う。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 無病種いもの選択
- (2) 窒素の過用を避ける。
- (3) ほ場の排水をよくする。

・ 薬剤防除

(バレイシヨ 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	コサイド3000 (水酸化第二銅)	
M1	ドイツボルドーA (塩基性塩化銅)	
M1	Zボルドー (塩基性硫酸銅)	
M5	ダコニール1000 (TPN)	
29	フロンサイド水和剤 (フルアジナム)	
M3+4	リドミルゴールドMZ (マンゼブ,メタラキシルM)	一部の地域では、リドミルMZ水和剤の成分であるメタラキシル剤(フェニルアミド系;系統番号4)に対する感受性の低下が確認されている(平成12年12月に検定)。このため、この薬剤の効果が低下している圃場では、同一系統薬剤の使用を控える。
27+11	ホライズンドライフロアブル (シモキサニル,ファモキサドン)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください(「[アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#)」)。

2. バレイシヨ ウイルス病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ウイルス病ではXモザイク病(Potato virus X)、えそモザイク病(Potato virus Y)、れん葉モザイク病(Potato virus X+Potato virus Y)、葉巻病(Potato leaf roll virus)、黄斑モザイク病(Potato aucuba mosaic virus)などがある。

ほ場ではXウイルスとYウイルスの複合感染によるれん葉モザイク病が最も多い。

これらウイルス病は種いもを通じて伝染し、ほ場では葉のすれあいや管理作業によって接触伝染をする。Yウイルス、葉巻病および黄斑モザイク病はアブラムシによって伝染する。葉巻病ウイルスを保毒したアブラムシは長期間感染能力を失わない。

2) 防除のねらい

- (1) 健全な種いもを植えつける。
- (2) アブラムシの駆除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全な種いもを植付ける。
- (2) 罹病株は圃場外へ持ち出し処分する。

(3) ほ場近くの雑草を刈り清潔にする。

・薬剤防除

[アブラムシの項](#)参照

3. バレイシヨ 軟腐病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態

本病の発生は立毛中よりも貯蔵中に多い。土壌伝染性でアブラナ科以外にも多くの作物を侵す。発病は収穫時期に降雨が多い場合または排水不良水田で裏作した場合に多い。

2) 防除のねらい

- (1) ほ場の排水をよくする。
- (2) 前作に多発したほ場では栽培しない。

3) 防除法

・耕種的防除

- (1) 収穫時にいもを傷つけないように注意する。
- (2) 春作いもは冷涼なほ場にうすく広げて風乾させてから貯蔵する。
- (3) 被害のあったほ場から採種はしない。

・薬剤防除

土壌消毒・資材消毒の項を参照

4. バレイシヨ そうか病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態

新しいもの形成直後からその生育中は絶えず発病し、いもにコルク質の褐色で中央がくぼんだあばた状の病斑を作る。病原菌は放線菌で、いもの病患部で越冬するばかりでなく、土壌の腐植質から栄養をとり長期間生存する。種いもによって伝染するほか土壌伝染もする。発生は乾燥しやすい砂質地や、中性～微アルカリ性の土壌で多い。

2) 防除のねらい

- (1) 伝染源を取除くことが大切である。
- (2) 無病いもを植付ける。連作は避ける。耕種的防除と土壌消毒などの薬剤防除を組合せた総合防除が必要である。

3) 防除法

・耕種的防除

- (1) 健全種いもを選ぶ。
- (2) 酸性肥料を用い、木灰および石灰の多施用をさける。
(pHが5.2以下の場合に発病しにくい。ただし、石灰が不足すると生育異常が発生する場合がある。そのため石灰は土壌分析に基づき適正量を施用する。)
- (3) 連作はさける。

(4) 生育期間中の過乾燥をさける。

・薬剤防除

種いも消毒

- (1) 種いもに付着した土壌に含まれている病原菌を除去するために、薬剤処理前に種いもを十分に水洗いし、付着した土を除去する。
- (2) 浸漬処理は種いもに薬剤を十分に付着させるため、種いもをつめたコンテナが十分沈むくらいの薬液を用意する。浸漬処理の場合、薬液は10回程度使用できる。
- (3) 散布処理の場合は、種いもを床等にうすく広げるかまたはコンテナに入れたまま、種いも100kgあたり5～6Lの割合で種いも全体に均一に散布する。
- (4) 薬剤処理後は、種いもを風通しのよいところすみやかに乾燥させた後、切断し切断面が十分コルク化した後（3～4日後）に植付ける。
- (5) 萌芽後の処理は、薬害を生じやすいので、できるだけ萌芽前に処理する。
- (6) 薬剤処理した種いもは、食用および飼料には供さないようにする。
- (7) 本剤は、ゴム手袋とマスクを着用して取扱う。
- (8) 薬剤処理後の廃液は川や養魚池等に流入しないように注意する。
- (9) そうか病の多発生ほ場では種いも消毒の効果が小さいので、土壌消毒を併用する。

(バレイショ そうか病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成分名)	備 考
25	アグレプト液剤 (ストレプトマイシン硫酸塩)	
25+M1	銅ストマイ水和剤 (ストレプトマイシン硫酸塩,塩基性塩化銅)	
25+1	アタッキン水和剤 (ストレプトマイシン硫酸塩,チオフエネートメチル)	
41+25	アグリマイシン-100 (オキシテトラサイクリン,ストレプトマイシン硫酸塩)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

土壌消毒

多発地では、クロールピクリンで土壌を消毒する。

土壌消毒・資材消毒の項を参照

5. バレイショ 象皮病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

新しいもの形成初期に感染し、いもの表皮層に浅い黄褐色～黒褐色不整形の病斑をつくる。病斑が乾燥すると網目状の亀裂ができる。土壌伝染するが、種いもによる伝染は少ない。土壌が中性～微アルカリ性で、水分含量が多い圃場で発生しやすい。

2) 防除のねらい

耕種的防除と薬剤防除を組み合わせた総合防除が必要である。

3) 防 除 法

そうか病に準ずる。

(害 虫)

1. バレイショ アブラムシ類 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

- (1) モモアカアブラムシは早春から晩秋までジャガイモの全生育期間を通じて寄生し、葉のほか茎や花、ときには葉の表面にも寄生する。本虫はジャガイモYウイルス (PVY)、葉巻ウイルス (PLRV)、キュウリモザイクウイルス (CMV) などを媒介する。
- (2) ワタアブラムシは夏期の寄生が最も多く、下葉に寄生する傾向がある。本種もCMVなどを媒介する。
- (3) ジャガイモヒゲナガアブラムシは生育初期から寄生するが、群生することは少ない。直接的な加害よりも各種ウイルス病を媒介して被害をもたらす。
- (4) チューリップヒゲナガアブラムシは初夏に寄生し始める。高冷地では多発生し直接的な加害も大きい。一方、平地では直接的な加害よりも各種ウイルス病を媒介して被害をもたらす。

2) 防除のねらい

アブラムシ類はウイルスを媒介し被害をもたらす。そのため、萌芽時から特に葉の裏面に薬液が十分にかかるように散布する。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

・ 薬剤防除

(バレイショ アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	オルトラン水和剤 (アセフェート)	
1B	オルトラン粒剤 (アセフェート)	
1B	ジメトエート乳剤 (ジメトエート)	

- 注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照
- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

2. バレイショ ジャガイモガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年間の発生回数が多く（7～8回）、夏期は一世代 20 日前後で経過する。成虫は一般に 3 月上旬ごろから春ジャガイモやナス科作物のほ場に飛来し、約 2 世代を経過する。収穫後はナスやトマトを集中的に加害したのち秋ジャガイモに移り、さらに約 2 世代を経過する。その後はほ場の残りいもや貯蔵いも内で幼虫あるいは蛹で越冬する。

2) 防除のねらい

年間の発生回数が多く、一世代の経過日数も短いので、栽培期間中は防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害いもは取り除き処分する。
- (2) ほ場または、ほ場の近くにくずいもを放置しない。
- (3) いもの貯蔵は、床下等の冷暗所を利用する。

・薬剤防除

(バレイショ ジャガイモガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成分名)	備 考
1B	オルトラン水和剤 (アセフェート)	
14	パダンSG水溶剤 (カルタップ)	

- 注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照
- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

3. バレイショ ニジュウヤホシテントウ（テントウムシダマシ） [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ナスのニジュウヤホシテントウの項を参照

2) 防除のねらい

ナスのニジュウヤホシテントウの項を参照

3) 防 除 法

・薬剤防除

(バレイショ テントウムシダマシ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ダイアジノン乳剤40 (ダイアジノン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

(16) サトイモの病害虫

(病 害)

1. サトイモ 軟 腐 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本菌はハクサイ・ダイコン・カブ・キャベツのほか、トマト・ジャガイモ・キュウリ・インゲン・ニンジン・セロリ・レタス・タマネギなど多くの作物を侵す。

2) 防除のねらい

アブラナ科軟腐病参照

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 被害地では輪作をし、イネ科作物を栽培する。
- (2) 罹病株を処分する。
- (3) 排水をよくする。

・ 薬剤防除

クロールピクリンによる土壌消毒をする。

(害 虫)

1. サトイモ ハスモンヨトウ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

・ 薬剤防除

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ハスモンヨトウ」の項参照

各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

(17) ショウガの病害虫

(病 害)

1. ショウガ 腐 敗 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

はじめ地際部が侵されて黄褐色になり、次第に軟化腐敗して表皮だけが残る。被害株は葉が急激に萎ちようし、鮮黄色から黄褐色に変色するとともに、葉緑より巻き上ってついに枯死する。腐敗した根茎は灰白色の汁液がでて特有の悪臭を放つ。貯蔵中の被害も大きい。

病原菌は土壌中または病根茎について越年し、伝染源となる。発病後の防除は困難である。

2) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 種根茎は無病のほ場から採取する。
- (2) 植付前病根茎を選別除去する。
- (3) 排水のよい無病地に栽培する。
- (4) 連作を避ける。
- (5) 窒素肥料の過多を避ける。

2. ショウガ 根茎腐敗病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

圃場での発生は、種ショウガによる持込みと、圃場での感染によるものがある。種ショウガによる持込みの場合、生育の初期、多くは萌芽後まもなく株全体が黄変枯死する。圃場感染が原因で発病する場合は、はじめ地上茎地際部に水浸状の軟化病斑を生ずる場合が多い。腐敗は下降し根茎に及ぶ。腐敗の進行は速い。地上部は黄変萎ちよう、または倒伏し、ついに枯死する。

2) 防 除 法

・耕種的防除

腐敗病の項を参照

・薬剤防除

(ショウガ 根茎腐敗病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4	リドミル粒剤2 (メタラキシル)	
21	オラクル顆粒水和剤 (アミスルプロム)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. ショウガ 紋 枯 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉鞘に発生し、イネ紋枯病と同様の病斑を生ずるが、多くの場合病斑部分は消失して楕円形に穴があく。

病斑が上位葉鞘まで及ぶことは少ないが、生育はかなり抑制される。

2) 防 除 法

・耕種的防除

種ショウガは、無病の圃場から採取する。

・薬剤防除

(ショウガ 紋枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
U18	バリダシン液剤5 (バリダマイシン)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(害 虫)

1. ショウガ アズキノメイガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

しんくい虫状に食害するのはアズキノメイガ、アワノメイガ、イネヨトウの幼虫で、その主体はアズキノメイガである。本虫は年4回から5回発生する。ショウガを加害するのは第2世代～第4世代幼虫で、最も甚だしく加害するのは8月～9月にかけての第3世代幼虫である。産卵部は上葉の葉舌部からは葉鞘の内側で、ふ化幼虫は止葉の葉ざやに包まれた比較的柔らかい部分から茎内に食入し上方へしんくい虫状に食害する。

茎間移動は活発で平均6茎を食害する。したがって被害は坪枯状にあらわれる。防除は幼虫のふ化食入期をねらう。発生消長が入り乱れて防除適期の決定はきわめて困難であるため、発生最盛期には散布間隔を短縮する。

2) 防 除 法

・ 薬剤防除

(ショウガ アズキノメイガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
14	パダンSG水溶剤 (カルタップ)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(18) トウモロコシの病害虫

(病 害)

1. トウモロコシ 倒伏細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態と防除のねらい

幼苗期には葉鞘に淡褐色水浸状の病斑を生じるが、病勢の進展が速く、茎も軟化腐敗して、株は倒伏するか、立枯れになる。幼苗期以後は、葉柄、側芽、雄穂、雌穂(苞葉)などに淡褐色水浸状の不整形病斑を生じる。葉鞘の病斑は、初め内側に現われ、のちに外側に及ぶ。病勢が激しく、茎の内部が腐敗すると、その部分より折れることがある。茎の内部の腐敗はメイガ類の食害痕からの二次的伝染による場合が多い。

第一次発生は種子伝染によるものと考えられる。バンタム系品種に発生が多い。8月に収穫するトウモロコシでは、6月上旬から7月にかけて高温多湿であると多発する。また食入性害虫も本病を多発させる原因となる。

2) 防 除 法

・ 薬剤防除

[トウモロコシのアワノメイガの項](#)

(害 虫)

1. トウモロコシ イネヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年4回発生する。発生は4月から7月にかけてが多い。トウモロコシの若い時期に芯に食入し、芯枯れとなる。

2) 防除のねらい

発生は田畑混合地域に多い。4月播きものは本葉5～6葉期と7～8葉期の2回、5月播きものは5～6葉期に1回薬剤を散布する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

早播きのものほど被害を受けやすいので被害の多い地域では晩播きにする。

2. トウモロコシ アワノメイガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年3回の発生で、第1回目は5月下旬～6月、第2回7月中旬～8月上旬、第3回8月下旬から10月に出る。成虫は播種期に関係なく雄穂抽出期に飛来産卵する。

2) 防除のねらい

- (1) 7月中旬から8月上旬の第2回成虫によるものが最も被害がひどい。
- (2) 薬剤防除の時期は播種期に関係なく雄穂抽出期から5～7日毎に2回、発生が多い場合には3回以上行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

早播きほど被害が少ない。

・薬剤防除

(トウモロコシ アワノメイガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	エルサン乳剤 (PAP)	
14	パダンSG水溶剤 (カルタップ)	
14	パダン粒剤4 (カルタップ)	株の上から均一に散粒する

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法](#)
[参照](#))。

3. トウモロコシ ツマジロクサヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防除法
 - ・耕種的防除
 - ・薬剤防除

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ツマジロクサヨトウ」の項参照

(19) メロン類の病害虫

(病 害)

1. メロン つる枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生態

茎、葉および果実に発生し、茎では地際部や節部の病斑に小黑粒点を生じる。病原菌は糸状菌の一種で、病斑上に柄子殻をつくる。生育適温は20～24℃でウリ科植物のみを侵す。病原菌は被害部の柄子殻などで生存し伝染源となる。柄子殻は適度な水分と温度を得ると、分生子が内部から漏れだし、雨滴によって周囲に飛び散る。子のう胞子は空気伝染する。また、分生子、柄子殻で種子伝染する。発育適温は24℃である。降雨、密植など湿潤条件時に発生が多くなる。露地で発生が多いが、トンネルでもプラスチックフィルムなど除去後多くなる。病原菌はわき芽を摘芯した傷口から侵入しやすい。また病原菌が柱頭から侵入し、果実の芯腐れをおこすこともある。

2) 防除のねらい

- (1) わき芽の摘芯部位には必ず薬剤を塗布する。
- (2) 発病前からの薬剤散布を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 畦の定植部を高く株元の乾燥をはかる。
- (2) 無病苗を植えつける。
- (3) 排水をはかり多湿に注意する。
- (4) 摘芯摘果は晴天時にする。
- (5) 収穫後の茎葉は圃場外へ持ち出し処分する。

・薬剤防除

(メロン つる枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	メロン	キュウリ	スイカ	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	○	○	○	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する。
M5	ダコニール1000 (TPN)	○		○	
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	○	○		
2	ロブラール水和剤 (イプロジオン)	○	○	○	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

2. メロン べと病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で分生子と卵胞子を形成する。病原菌は被害植物で越冬し水滴によって生ずる飛沫土粒とともに下葉に付着し、気孔から侵入して発病する。発病適温は20℃前後で、多湿、密植、肥料切れした場合に発生しやすい。5～6月の温暖多雨時の発生が多い。秋期にも発病が多くなる。

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

「野菜の病害虫防除① (1) キュウリの病気 2. べと病」の項参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

3. メロン 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

[スイカ炭疽病](#)参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

4. メロン つる割病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

キュウリのつる割病の項を参照

2) 防除のねらい

- (1) 接ぎ木栽培を行うが、台木と穂木との親和性に注意する。
・台木の種類等については「病虫害防除共通資料の(6) 野菜品種の耐病性」参照

3) 防 除 法

キュウリのつる割病参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

5. メロン うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

糸状菌の一種で子嚢菌類に属し、分生子および子嚢を産する。本病は 15～28℃で多発し、30℃または多湿になると抑制される。主として、葉に発生するが、葉柄、茎にも発生することがある。被害部で子嚢殻で越冬し、これから発生した子嚢の胞子が伝染源となる。ハウスで発生が多いが、露地でも生育後期に発生が多い。また、通風不良、多肥の場合は発生が多い。

2) 防除のねらい

早期発見、早期防除に努める。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 密植をさけ透光、通風をよくする。
- (2) 窒素肥料の多用や偏用を避ける。
- (3) ハウス、トンネルでは、換気をよくする。
- (4) 排水をよくし、灌水過多にならないようにする。

・ 薬剤防除

(メロン うどんこ病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3	トリフミン水和剤 (トリフルミゾール)	
3	ルビゲン水和剤 (フェナリモル)	
19	ポリオキシシンAL水和剤 (ポリオキシシン複合体)	
M10	モレストン水和剤 (キノキサリン系)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

6. メロン 斑点細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防 除 法
 - ・ 耕種的防除
 - ・ 薬剤防除

キュウリの斑点細菌病の項参照

(1) 銅剤は連用すると葉が硬化し、薬害が生じる場合がある。

(メロン 斑点細菌病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	Zボルドー (塩基性硫酸銅)	
M1	キノンドー水和剤40 (有機銅)	幼苗期、高温時には薬害に注意する。

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

7. メロン 褐斑細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本病原菌はカボチャ、キュウリ、スイカ、シロウリ、ヒョウタンにも寄生する。種子伝染性である。罹病したカボチャを台木として用いると二次的に接ぎ穂のメロンに伝染する。二次伝染は風雨や管理作業などによって、気孔、水孔、傷口などから起こるものと考えられる。本病は茎葉に発生し葉の病斑は、葉脈に沿って網目状に褐変し、それらが融合すると、角型病斑となり、べと病とよく似た症状を呈する。

2) 防除のねらい

- (1) 種子伝染するので、種子消毒を徹底する。
- (2) 多湿時にまん延し易いので薬剤による予防散布を徹底する。

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 本病は多湿時にまん延するのでハウスでは換気に注意する。
- (2) 発生地では連作を避ける。
- (3) かん水はマルチ下または地中かん水とし、少量ずつ回数を多くする。
- (4) 発病圃場では夏の高温時に密閉して蒸込み、さらに湛水等により伝染源を絶つ。
- (5) 側枝下葉の摘除は多湿時の曇雨天日をさけ、晴天日に行う。

8. メロン 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・ 耕種的防除
- } キュウリの灰色かび病の項参照

9. メロン 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

台木用カボチャが疫病に侵されることが多く、地際部がくびれ、茎葉が萎凋して立枯れ症状となる。病原菌は糸状菌の一種で、遊走子のうおよび卵胞子を生じる。生育適温は 30～32℃である。病原菌は、罹病植物とともに土壤中越冬して、病斑に生じた遊走子で水媒伝染する。降雨などの多湿条件で被害が著しい。排水不良、湿潤な土地で発生が多い。

2) 防 除 法

キュウリの疫病の項（野菜の病虫害防除①（1）キュウリの病気）参照。

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

10. メロン ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

病原ウイルスはズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）、カボチャモザイクウイルス（WMV）とキュウリモザイクウイルス（CMV）の 3 種がある。

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- } キュウリのウイルス病類の項参照

11. メロン えそ斑点病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉、茎、根および果実など、植物体の各部位に発病し、褐色のえそ斑を現す。発病部位や症状で 10 種類に分けられるが、主は葉の小斑点、大型病斑、茎の鳥足型、えそ型である。メロンえそ斑点ウイルス（MNSV）は菌類媒介性ウイルスで寄宿主範囲は比較的狭く、ウリ科植物に限定される。本ウイルスは、土壌伝染、接触伝染および種子伝染をするが、アブラムシによる虫媒伝染は行わない。伝染の主体は土壌伝染で、土壌に生息するオルピディウム菌によって媒介される。

2) 防 除 法

・ 耕種的防除

- (1) 土壌および堆肥等の消毒を行う。蒸気消毒の場合は 90℃、30 分以上行う。
- (2) 種子は健全種子を使用し、保毒の恐れがある場合は 70℃、72 時間の乾熱消毒を行う。

(3) 発病株は早期に抜き取り、圃場外へ持ち出し処分する。

・ **薬剤防除**

病害虫防除共通資料の(7) 土壌消毒・資材消毒の項を参照

(害 虫)

1. メロン アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

「野菜の病害虫防除①(1) キュウリ害虫 3. アブラムシ類」の項を参照

2) 防除のねらい

苗床及び本ぼの生育初期に、有翅虫の侵入を徹底する。

3) 防 除 法

・ **耕種的防除**

「野菜の病害虫防除①(1) キュウリ害虫 3. アブラムシ類」の項を参照

・ **薬剤防除**

(メロン アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	エルサン乳剤 (PAP)	
1B	ダイアジノン乳剤40 (ダイアジノン)	
3A	マブリック水和剤20 (フルバリネート)	
4A	アドマイヤー水和剤 (イミダクロプリド)	露地栽培で使用する場合、着果後に限る。

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. メロン ウリハムシ(ウリバエ) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防 除

3) 防 除 法

・ **耕種的防除**

} [スイカのウリハムシ](#)参照

3. メロン コナジラミ類 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・ 耕種的防除
 - ・ 薬剤防除
- 「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・コナジラミ類」の項参照

(メロン コナジラミ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	テルスター水和剤 (ビフェントリン)	
3A	トレボン乳剤 (エトフェンブロックス)	
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
4A	アドマイヤー水和剤 (イミダクロプリド)	露地栽培で使用する場合、着果後に限る。
4A	ベストガード水溶剤 (ニテンピラム)	
4A	ベストガード粒剤 (ニテンピラム)	
21A	サンマイトフロアブル (ピリダベン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

4. メロン ミナミキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・ 耕種的防除
 - ・ 薬剤防除
- 「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」の項参照

(メロン ミナミキイロアザミウマ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	アドマイヤー水和剤 (イミダクロプリド)	露地栽培で使用する場合、着果後に限る。
4A	アドマイヤー1粒剤 (イミダクロプリド)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してく

ださい。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

5. メロン ネコブセンチュウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- ・耕種的防除
- ・薬剤防除
- } キュウリのネコブセンチュウの項参照

薬剤の使用法については、共通資料「土壌線虫」の項を参照

(20) カボチャの病害虫

(病 害)

1. カボチャ ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

病原ウイルスはズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV)、カボチャモザイクウイルス (WMV) とキュウリモザイクウイルス (CMV) の3種である。和種カボチャではCMVはほとんど感染しないが、洋種カボチャには3種のウイルス病が発生する。

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- } キュウリのウイルス病類の項参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

2. カボチャ ベ と 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

露地、トンネルのいずれの作型でも発生する。露地では降雨が続いた場合や排水不良な畑で多発する。またトンネルなどの多湿条件でも多発する。気温が20～25℃で葉に水滴が付着するような条件下ではいつでも発生する。

2) 防除のねらい

- (1) 発生前からの定期的な予防散布を実施する。
- (2) 肥料切れに注意し、発病の多い下葉から中葉を主体に葉の表裏に十分薬剤を散布する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 敷わらやプラスチックフィルムでマルチをする。

(2) 肥料切れにならないように肥培管理に注意する。

・薬剤防除

(カボチャ ベと病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する。
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

3. カボチャ 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉・莖・果実を侵し、病斑部は褐色に軟腐する。果実では、表面に白色の菌糸が密生する。病原菌は糸状菌の一種で生育適温は 28～30℃で、罹病植物とともに土壤中で菌糸、胞子の形で存在し越冬する。幼植物を侵し、以後病斑に生じた遊走子で水媒伝染する。発生は降雨と密接に関係している。そのため、前年の多発地でも乾燥状態が続くとほとんど発生しない。発生は雨の当たらないハウス内で少なく、露地では梅雨期や秋雨時に多い。

2) 防除のねらい

- (1) 排水をはかり、多湿をさけ、土粒が降雨などではね上がらないようにマルチする。
- (2) 果実が直接土と接しないよう、ポリ製マットにのせる。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) クリーク水、河川水のかん水は発病の原因となるので、水道水又は井戸水を用いるのが望ましい。
- (2) 罹病株は圃場外へ持ち出し処分する。
- (3) 水、露滴などで、土をはね上げ伝染をするので、敷わらかプラスチックマルチをする。
- (4) 莖の地際部付近をやや乾燥ぎみとするため高畦とする。
- (5) かん水等で多湿にならないように注意する。

・薬剤防除

- (1) 床土はあらかじめクロールピクリンで消毒する。土壌消毒、資材消毒の項を参照

(カボチャ 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する
P7	アリエッティ水和剤 (ホセチル)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

4. カボチャ うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は2種類あるが、主は *Sphaerotheca fuliginea* である。本菌はメロン、カボチャ、ホウセンカ、コスモスなどに寄生する。生育適温は25℃前後である。被害部の閉子のう殻で越冬し、翌年の発生源となる。2次伝染は分生子が風によって飛散し行う。ハウスでは冬期にも発病し分生胞子で越冬する。高温、過乾燥、多湿条件で発生が多い。ハウスでは換気が不十分な場合に多発する。

2) 防除のねらい

キュウリうどんこ病の項を参照

3) 防 除 法

・耕種的防除

キュウリうどんこ病の項を参照

・薬剤防除

(カボチャ うどんこ病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M5	ダコニール1000 (TPN)	
3	トリフミン水和剤 (トリフルミゾール)	
3	ルビゲン水和剤 (フェナリモル)	
M10	モレスタン水和剤 (キノキサリン系)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

5. カボチャ つる枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

茎の地際部の病斑に小黑粒点を生じ、ひどくなると枯死する。病原菌は糸状菌の一種で、病斑上に柄子殻をつくる。生育適温は 20～24℃でウリ科植物のみを侵す。病原菌は被害部の柄子殻などで生存し伝染源となる。柄子殻は水分と温度を得ると、分生子が内部から漏れだし、雨滴によって周囲に飛び散る。子のう胞子は空気伝染する。また、分生子、柄子殻などで種子伝染する。発病適温は 24℃前後であるが高温時にも発生する。降雨、密植など湿潤条件の時にも発生が多くなる。露地で発生が多いが、トンネルでもプラスチックフィルムなど除去後に多くなる。

2) 防除のねらい

キュウリつる枯病の項を参照

3) 防 除 法

・耕種的防除

キュウリつる枯病の項を参照

・薬剤防除

(カボチャ つる枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#))。

(害 虫)

1. カボチャ ミナミキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除・ミナミキイロアザミウマ」の項参照

2. カボチャ アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

キュウリのアブラムシ類の項を参照

3. カボチャ ウリハムシ (ウリバエ) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- } [スイカのウリハムシの項](#)参照

(21) スイカの病害虫

(病 害)

1. スイカ 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で分生子層上に分生子と剛毛を生ずる。病原菌は主として菌糸、時に分生胞子の形で被害部についたまま土中で越冬する。発育適温は 22～28℃である。第 1 次伝染は土中で形成された分生子が降雨などの飛沫により植物体に付着して起こる。2 次伝染は病斑上に形成された分生子によって起こる。夏期に降雨が多い年に発生が多い。圃場の排水が不良で湿潤な場合にも発生が多く、特に梅雨期に多い。

2) 防除のねらい

- (1) 排水不良は本病の発生を助長するので、排水対策を十分行う。
- (2) 降雨による地表面からの病原菌の跳ね上がりによる感染を防ぐ。
- (3) 梅雨期に発生が多いため、この時期の防除を徹底する。
- (4) 罹病した果実は出荷後に腐敗することが多いので、果実に感染しないように、果実が直接土壌に触れないなどの注意をする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 連作をさける。
- (2) 敷わら、プラスチックフィルムを行い、土粒のはね上りを防ぐ。
- (3) 降雨を防ぐために、ハウスや大型トンネルを用いた雨よけ栽培を行う。
- (4) 輸送中に腐敗することが多いので注意する。
- (5) 誘引や整枝等の管理作業は晴天日に行う。

・薬剤防除

(スイカ 炭疽病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	スイカ	キュウリ	メロン	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	○	○	○	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する。
M5	ダコニール1000 (TPN)	○	○		
M5	ダコニール粉剤 (TPN)	○	○		
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	○	○		

- 注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照
- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

2. スイカ 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は糸状菌の一種で生育適温は 28～32℃で、スイカ、キュウリ、カボチャなどウリ科以外は侵さない。病原菌は、罹病植物とともに土壤中越冬し第 1 次伝染源となる。病斑部に生じた遊走子で 2 次伝染する。降雨などの多湿条件で被害が著しい。畦底は湿度が高くなるので、溝に伸びたつるや、溝近くのつるに初発を認めることが多い。また梅雨期ごろから発病が多い。排水不良、湿潤な土地および窒素過多で発病が多い。

2) 防除のねらい

- (1) 多湿条件で発病が多いので排水を図り、多湿を避ける。
- (2) 梅雨期に発病が多いため予防散布を行う。
- (3) 薬剤散布は茎葉に加え、敷きワラや畦溝にも十分散布する。
- (4) 発病前からの散布が重要であるが、発病後に防除する場合は被害茎葉を圃場外に持ち出した後に行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 無病地に植え付ける。
- (2) 圃場の排水を図る。
- (3) 敷きワラやプラスチックフィルムでマルチを行う。
- (4) 畦溝につるを這わせない。

・薬剤防除

(スイカ 疫病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	スイカ	キュウリ	メロン	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	○	○	○	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する。

- 注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照
- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

3. スイカ つる枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は柄子殻および子のう殻の形で被害植物上で越冬する。翌年これから胞子を飛散し、以後は病斑上に生じた胞子でまん延する。また種子伝染もする。発育適温は 24℃で、湿潤時に発生が多い。降雨は発病を助長する。子葉や若葉は罹病しやすく、これが第2次伝染源となる。また、接ぎ木部の傷口および整枝などの傷口から病原菌が侵入して発病することが多い。発病は5月下旬ごろから多くなる。

2) 防除のねらい

- (1) 接ぎ木部位に薬剤塗布をする。
- (2) 発病前から薬剤散布を徹底する。
- (3) 密植をさけ、適度に整枝して茎葉の重なりを少なくし風通しを良くする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 圃場の排水を図る。
- (2) 敷きワラやプラスチックフィルムでマルチを行う。
- (3) 畦の定植部を高くし、株元の乾燥を図る。
- (4) 無病苗を植え付ける。
- (5) 被害茎葉は圃場外へ持ち出し処分する。

・薬剤防除

[メロンのつる枯病の項](#)参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

4. スイカ つる割病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

キュウリのつる割病の項を参照

2) 防除のねらい

ユウガオ、カボチャを台木として接ぎ木栽培をする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 接ぎ木栽培をする。
- (2) 5年以上の輪作をする。
- (3) 被害株は圃場外へ持ち出し処分する。
- (4) 無病地に植付ける。
- (5) 隣接スイカほ場からの流水を防ぐ。
- (6) 石灰や完熟堆肥の施用は発病を抑制する。

・薬剤防除

土壌消毒、特に育苗用土は必ず消毒する。

5. スイカ うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

キュウリのうどんこ病の項を参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

6. スイカ 緑斑モザイク病（スイカ系） [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉はモザイク症状を、果皮にはえそ斑症状を呈する。また果実内の種子の周辺が過熟状になり赤紫色に変色する。果肉はコンニャク状に軟化する。果肉内に黄色繊維が固まって筋ができる。

本県での発生は確認されていないが、発病した場合の被害は甚大であるので注意する。

2) 防 除 法

キュウリのウイルス病類（KGMMV）の項を参照

（害 虫）

1. スイカ タネバエ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年に4～5回発生し、卵、幼虫、さなぎ、成虫の各態で越冬する。成虫は3月ごろから増加しはじめ、4～5月に最も多くなる。有機質肥料の中で堆肥・油粕・魚肥などの腐敗臭気のあるものに誘引される。卵は湿った土の割れ目や土塊の間などに産みつけられ、4～5日でふ化する。幼虫は種子を発芽時に加害して15日程度で蛹化する。発生は夏期には少なくなるが、10月ごろになると再び多くなり12月以降は減少する。

2) 防除のねらい

予防に重点を置き、薬剤の土壌処理をする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

堆肥、農産製造粕、魚粕などはなるべく控えめにやり、施用後は、厚く覆土しておく。

・薬剤防除

(スイカ タネバエ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ダイアジノン粒剤3 (ダイアジノン)	種子に直接触れると薬害を起こすことがあるので注意する。

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

2. スイカ ウリハムシ (ウリバエ) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本虫は日当たりのよい石垣やへいあるいは雑草の根元などで成虫態で越冬する。4月ごろから現われ始め、5～6月にかけて最も多くなる。株の根元や土中の浅い所に産卵し、10日～14日でふ化する。幼虫は土中で作物の根を食害し、約30日で蛹となる。6月上旬・中旬から新成虫が現われはじめ8月上旬・中旬ごろ最も多くなり、10月上旬から越冬に入り始める。

ウリ類で最も被害が多く、そのほかハクサイ・ダイコン・ナス・シュンギク等を一時的に食害する。

2) 防除のねらい

防除は成虫の食害防止だけでなく、産卵防止に重点をおいて実施する。耕種的防除として苗を寒冷紗等で被覆する。生育初期は薬剤防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

紙・寒冷紗・プラスチックフィルムのキャップで障壁をつくり成虫の飛来を防止する。

3. スイカ ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

主にナミハダニ・カンザワハダニが発生する。年間に多くの世代を繰り返す。高温乾燥条件下で繁殖が盛んとなり1世代10日前後で卵から成虫になる。

しかし、低温条件下では成育および繁殖はおさえられる。夏から秋にかけて発生が多く見られる。温室・ハウスおよびトンネルでは低温期や梅雨期でもかなりの発生がみられる。

2) 防除のねらい

- (1) 発生が多くなると駆除が困難となるため、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 葉裏へ寄生することが多いので、薬液が葉裏へ十分かかるように散布する。

3) 防 除 法

・薬剤防除

(スイカ ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	マブリック水和剤20 (フルバリネート)	
12D	テデオン乳剤 (テトラジホン)	
30	グレーシア乳剤 (フルキサメタミド)	
33	ダニオーテフロアブル (アシノナピル)	

注) IRACコードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMICホームページの、HOME > 農薬

＞登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

4. スイカ ネコブセンチュウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・耕種的防除
 - ・薬剤防除
- } キュウリのネコブセンチュウを参照

薬剤の使用については、共通資料「土壌線虫」の項を参照

5. スイカ アブラムシ類 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

キュウリのアブラムシ類を参照

ただし、各薬剤の使用法については農薬ラベルを参照すること。

6. スイカ ミナミキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- } 「野菜・花きに発生する侵入害虫の生態と防除・ミナミキイロアザミウマ」の項参照

(22) ニンニクの病害虫

(病 害)

1. ニンニク 春 腐 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

発生は2～4月に多く、収穫期まで続く。病原菌は土壌中で長期間生存しており、降雨時に飛沫とともに茎葉に達し、風害や寒害等で受けた傷口から侵入する。病斑は、はじめ水浸状になり、その後上下方向に拡大し、淡褐色となり腐敗する。さらに新葉も汚白色に変色して腐敗し、次いで球部が軟化腐敗し枯死する。

2) 防除のねらい

発生初期と風雨後の防除に重点を置く。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 連作を避ける。
- (2) 圃場の排水に努め、過湿を避ける。

・薬剤防除

(ニンニク 春腐病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
MI	コサイド3000 (水酸化第二銅)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法](#)参照)。

2. ニンニク さ び 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は被害植物体上で越冬し、翌年夏胞子を飛散する。4月頃から収穫期にかけて発生するが、一般に生育末期に多発することが多い。肥料切れなどで草勢が衰えたり、多肥の場合に発生が多い。

2) 防除のねらい

肥料切れなどで草勢が衰えると被害が大きくなる。

3) 防 除 法

・耕種的防除

ネギなど伝染源となるような作物を近くに栽培しない。

(害 虫)

1. ニンニク ネ ダ ニ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ニンニク、ネギ、ラッキョウの外、各種の球根類、アブラナ科野菜、ブドウなど多くの作物の地下部に寄生加害する。年 10 数世代をくり返し、球根や根に寄生した親ダニあるいは若ダニで越冬する。地温の高低によって年間の発生世代数が異なるようである。

有機質に富んだ砂土、酸性の砂土に発生が多い。

2) 防除のねらい

- (1) ダニの寄生していないものを植える。
- (2) 連作を避ける。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 酸性砂土に多いので石灰を施して pH を調整する。
- (2) 施肥は繁殖期を避け、作付け前の産卵期前に施す。
- (3) ネダニの寄生が比較的少ないスイカ、カボチャ、シロウリ、ダイズ、ソバ、ショウガ、ナガイモなどと輪作する。

(23) インゲンの病害虫

(病 害)

1. インゲン 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

3月頃発芽とともに発生し始め、雨季にはさや(莢)にも発生し甚大な被害をもたらす。主に菌糸で種子に付着して伝染源となる。また菌糸や胞子で罹病植物とともに残る。どの部位にも発生するが、特にさや(莢)、種実の被害が大きい。葉では主として葉脈部に黒色または暗褐色の病斑を形成し、茎、さやに生ずる時は褐色の病斑を作り、後にくぼんで黒色となる。

2) 防除のねらい

健全種子の使用および被害茎葉の除去が重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全株から採種する。
- (2) 連作を避ける。
- (3) 有機質肥料を多用し、三要素の配合に注意し肥料切れしないようにする。
- (4) 収穫後被害茎葉は圃場外へ持ち出し処分する。

・薬剤防除

(インゲン 炭疽病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生じることがあるので注意する

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

2. インゲン さ び 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

7～8月頃から成熟期にかけて、葉に発病し、多湿、通風不良のほ場では甚発生することがある。一般にわい性種で発病しにくく、つる性種で発生が多い。葉では初め蒼白色の小斑を生じ、次第にふくれてさび病特有の病斑となり、赤褐色の粉末(夏胞子)を飛散し、さらに秋には黒褐色の斑点を混在し黒褐色の粉末(冬胞子)を飛散する。病原菌は夏、冬胞子の形で越冬し、伝染源となるものと考えられる。

2) 防除のねらい

輪作を行う。

3. インゲン ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

インゲンのモザイク病は現在4種のウイルスが確認されている。そのなかでインゲン黄斑モザイクウイルス（えそ系）による被害が増加している。幼苗期から発病し葉脈に沿った部分にはえそ症状を、茎には茶褐色の条斑をつくる。その後、わい性となり枯死する。22～26℃で最も病徴を現わす。つる性品種が弱い。種子伝染、汁液による伝染、アブラムシでも伝染する。

2) 防除のねらい

発病株の早期除去及びアブラムシによる伝染を防ぐため本虫の駆除が大切である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全株から採種する。
- (2) 病株の早期発見、早期除去
- (3) プラスチックシルバーマルチによるマルチを行う。

・薬剤防除

- (1) アブラムシ（モモアカアブラムシ、マメアブラムシ）の防除をする。
- (2) 薬剤防除

[アブラムシ類の項](#)参照

4. インゲン 青 枯 病 [\[目次に戻る\]](#)

トマトの青枯病の項を参照

5. インゲン 白 絹 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本病は主として地際部の茎に発生する。地ぎわの茎でははじめ白色綿状の菌糸が層状に着生する。このため、地上部の生育は衰え、茎や葉は菌化し、ついには枯死する。病斑部には粟粒大の黄褐色の菌核を形成する。この菌核が翌年の伝染源となる。

2) 防除のねらい

- (1) 高温多湿のときに発生が多い。
- (2) 発病後の防除は困難である。イネ科作物との輪作や罹病植物の処分、特に発病株は菌核をつくる前に除去する。
- (3) 湛水できるところでは3、4か月間湛水する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病ほ場では4か月湛水するか、田畑輪換する。

(2) 発病株は菌核が形成される前に早めに抜き取る。

(害 虫)

1. インゲン アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

主にマメアブラムシが寄生する。生育初期に高温、乾燥が続くと多発生し、汁液を吸収する。また、ウイルス病を媒介する。

2) 防除のねらい

生育初期のアブラムシの駆除を徹底する。

3) 防 除 法

・ 薬剤防除

(インゲン アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	エルサン乳剤 (PAP)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

2. インゲン マメノメイガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年2～3回の発生と考えられる。老熟幼虫は作物残屑の中で越冬し、7月～8月頃成虫が羽化してインゲンの葉柄やさやの基部に産卵する。ふ化幼虫はさやに食いこみ、食入口から褐色の虫ふんを多量に排出するので、その被害は容易に察知できる。

2) 防除のねらい

- (1) ほ場の清掃に努める。
- (2) 密植、過繁茂になるような栽培は避ける。
- (3) 薬剤は着莢の初期から数回散布する。

3. インゲン アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」の項参照

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

(24) ソラマメの病害虫

(害 虫)

1. ソラマメ アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・ 耕種的防除

・ 薬剤防除

「野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」の項参照

(ソラマメ アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	未成熟 そらまめ	そらまめ	備 考
23	モベントフロアブル (スピロテトラマト)	○		

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#))。